

造山古墳について

造山古墳は、全長 350 m の前方後円墳です。作られたのは 5 世紀初め頃と考えられます。昨年度は後円部北の墳丘裾に発掘し、葺石の一部と思われる部分を確認しました。今年度発掘している後円部裾は後世の掘削痕があまりみられない、保存状態の良い部分が含まれていると考えられました。また、「造出し」付近も発掘しました。

調査の成果

今回の調査では、後円部 4 か所 (T1 ~ T3・T6)、造出しに 4 か所 (T4・T5・T7・T8) の調査区を設定しました。後円部は、用水路側から大きく掘削されており、トレンチ 2 を除き、墳端に当たる個所はすでに破壊されているようです。トレンチ 2 において確認した葺石は、後円部の斜面全体に及んでいたものと考えられます。造山古墳の形や規模を今後追求していくうえで貴重な発見といえます。一方、造出しの調査では、葺石や盛土など遺構は確認されませんでした。現代の造成土が厚く堆積しているため、地山の確認もできませんでした。

T1 では、後世の改変によって葺石はすでに失われていました。盛土の痕跡も確認されませんでした。現在見える石は本来葺石として置かれていたものが転落して堆積したものと考えられます。

T2 では、保存状態の良い葺石を全面で確認できました。出土した葺石から、一段目墳丘斜面の角度は約 20 度程であったことがわかりました。葺石の端部について崩れており、石の配置が列状になっていませんでしたが、このあたりが後円部の端になるものと考えられます。葺石の石材は大きいものは一辺 40cm 程の角ばった石を利用しています。石材の多くは花崗岩と考えられます。

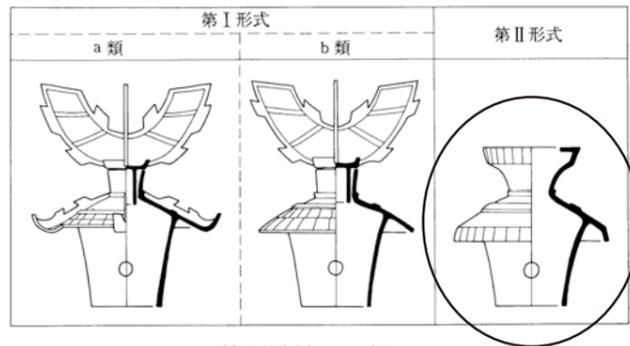
T3 では、後世の破壊が及んでおり、現代ゴミの堆積層の直下に地山が確認されました。葺石や盛土は確認できませんでした。

T6 では、後世の破壊によって、調査区の西半部では葺石・盛土ともに失われていました。しかし、東半部では、多数の埴輪が出土しました。葺石は残っていなかったものの、盛土の堆積を確認することができました。

出土遺物について

各調査区で埴輪が出土していますが、T6 では保存状態の良い埴輪が多数出土しました。埴輪の多くは円筒埴輪ですが、埴輪の表面には成形時の加工痕（ヨコハケ）が明瞭に観察できるものが多くみられます。

また、円筒埴輪の他に、蓋形埴輪や直弧文を描いた埴輪などが出土しています。円筒埴輪のサイズは、直径 40 ~ 50cm と大型です。周辺の千足古墳等と比べても大型であり、墳丘規模だけでなく、埴輪についても格差があったことが窺えます。また、蓋形埴輪の一部には立飾りを持たない特殊なタイプが含まれていました。古市古墳群など畿内の一部の古墳でしか確認されておらず、埴輪造りにおける造山古墳と畿内の関係が窺える新たな発見です。



蓋形埴輪の分類図

松木武彦 1994 「吉備の蓋形埴輪」『古代吉備』第 16 集より

造山古墳発掘調査現地説明会

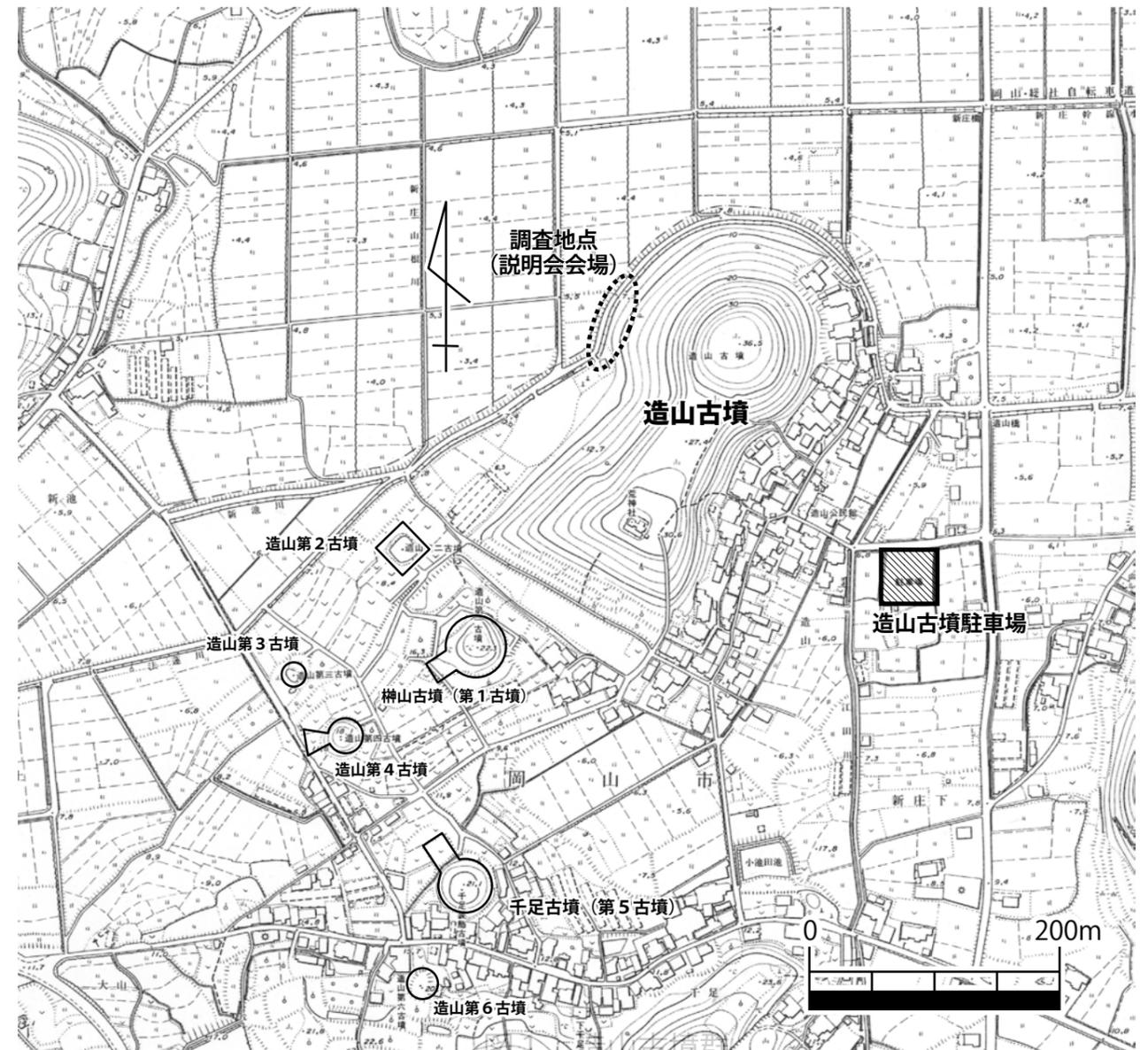
岡山市教育委員会

日時：平成 30 年 12 月 2 日 (日)

場所：岡山市北区新庄下 (造山古墳)

はじめに

岡山市教育委員会では、造山古墳の範囲確認を目的とする発掘調査を、10 月 30 日から進めてきました。このたび調査がほぼ終了したため、みつかった遺構や遺物を公開することとなりました。今回の発掘調査では、造山古墳の葺石や埴輪列の確認を目的として史跡地内の後円部墳丘裾から、「造出し」と呼ばれる四角い突出部付近を発掘しました。調査の結果、後円部裾付近の葺石を確認することができました。また、埴輪が多数出土しました。



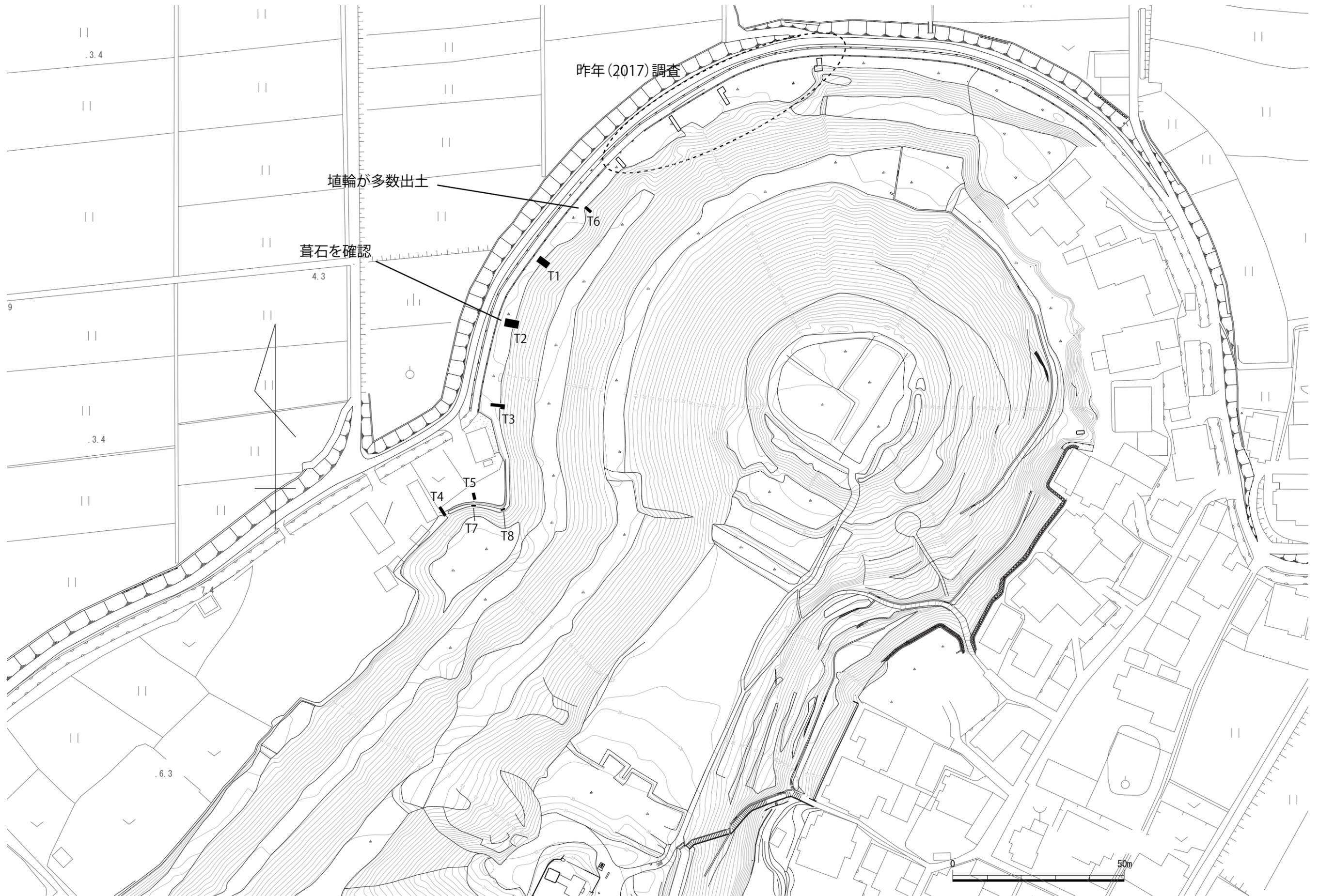


図2 造山古墳調査区全体図 (1/1000)